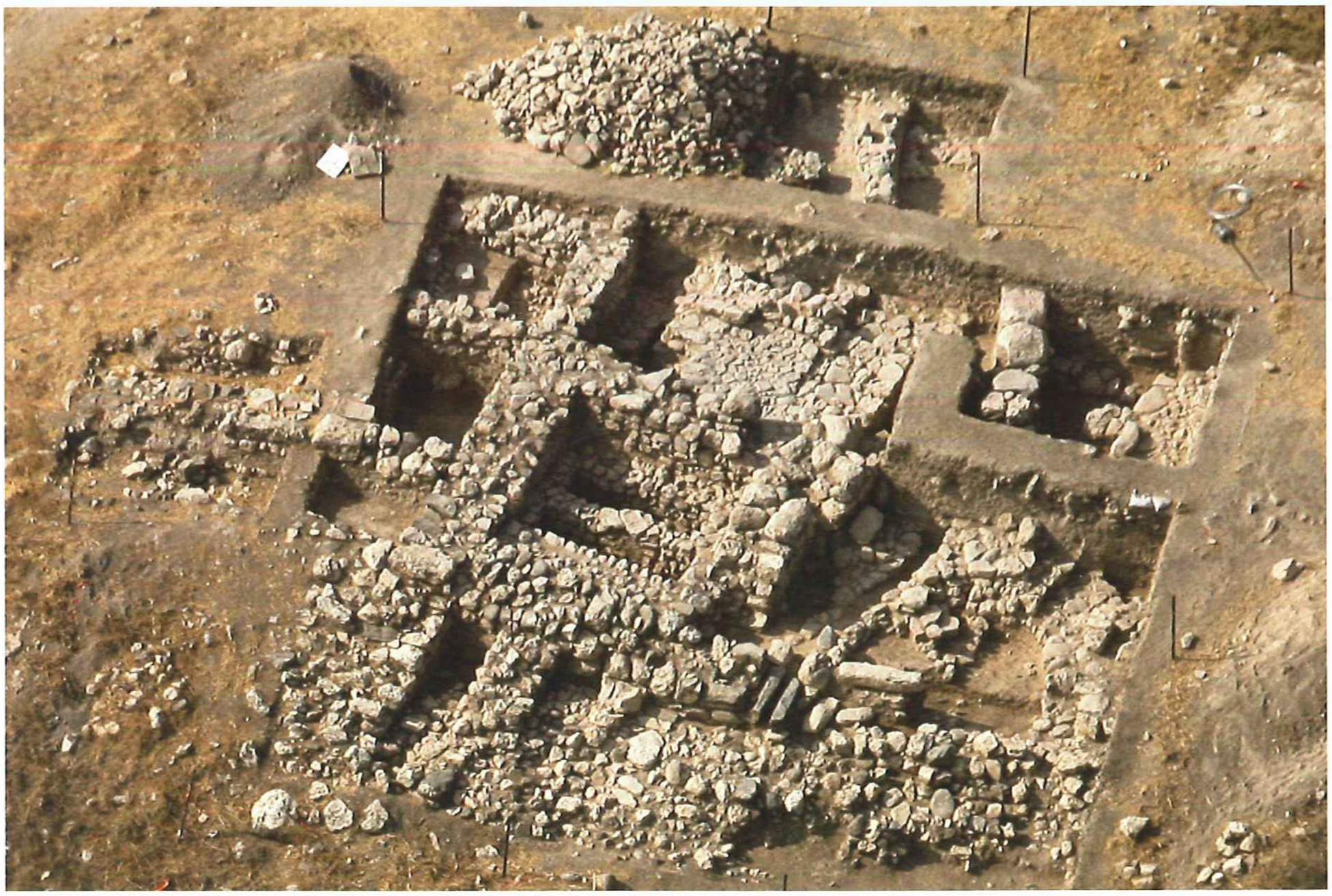
城門を探る　－A地区の発掘調査－

テル・レヘシュ遺跡は南北に長い、北を底辺とする隅丸の逆三角形を呈していて、上段と下段の２段になっている。上段の斜面は急峻であるが、下段の斜面はなだらかで、その西北部には幅約30ｍ程のテラスが認められる。このテラスは遺跡にあがる通路として利用されていたとみられ、西から入ってきた通路がこのテラスを経由して、北側をまわり、そこから遺跡にあがるのではないかと考えられた。したがって、アクロポリスの北部には、その入り口が存在したのではないかという予測のもとに、ここに調査区を設置して調査を行なった（A地区）。

調査によって、一辺が５ｍの矩形の大型の建物が南北に２棟並んで検出された。あるいはもう１棟南に続く可能性もあるが、調査区外であるため確認はできていない。これらは壁の幅が１ｍを越える非常に立派な建物で、先に述べた北からの通路が、町に入る場所につくられた城門の可能性が考えられた。通路はこの建物の西に想定され、同様の建物がその西に並ぶものと推測される。しかし、通路はこの箇所の撹乱が著しく道路遺構としては把握できていない。わずかに、北側の建物に接するような位置に、町の内部の水を流すためであろうか、南北方向に伸びる排水溝を確認しているにすぎない。また、西に対する位置にあるはずの建物もまだ、確認はできていない。

この建物の時期は出土遺物が細片であるため、確定することが難しいが、北側の建物には鉄器時代Ⅰ期の東から延びる幅１ｍ程の城壁が取り付いており、少なくともこの時期には機能していたことがわかる。また、南側の建物は鉄器時代Ⅱ期には別の建物に壊されているので、その下限をしることができる。B地区では中期青銅器時代の城壁も確認されているので、今後はこの建物のつくられた時期が、青銅器時代中期にまで遡り、継続して使用されたものかどうかなどを確認していく必要がある（日野）。



A地区の建築遺構群